

太平洋の現場から

自然と共存する寛容な パラオの人々

在パラオ日本国大使館派遣員 持田 貴雄

Takao MOCHIDA

どこまでも広がる青い空と海。その間で目映い緑が映えるキノコ型をしたロックアイランドの島々。パラオの代名詞とも言える自然豊かな光景が黄ばみ始めたのは4月の半ば頃であっただろうか。

昨年末より、エルニーニョの発生が予測され、それに伴う干ばつの危険性が新聞報道などで警告されつつも、南国のスコールを目にしてどこか他人事のように感じていた矢先、街の水道が止まった。首都圏であるコロール・アイライ地区では、3月12日の14時間断水を皮切りに、同19日より16時間、同22日より18時間、同29日から至っては、地域ごとに断水時間はことなるものの、朝夕それぞれ2時間ずつしか水が使えない20時間の計画断水が行われた。(一時的にはあるが)店頭のパペットボトルが消え、水の出る間にありったけの容器に水を溜める生活が始まった。

政府は、教育・医療機関への影響や、刑務所内の囚人の生活環境までもを懸念する声明を発表し、節水に努めることを国民に訴えかけた。そのような中、3月22日には大統領が非常事態宣言を発令。いよいよ水源の水が枯渇すると、非常事態宣言により一時的に付与された権限により大統領は2百万米ドルの緊急予算を抛出。かつて使用されていた井戸の再試掘や代替水源の水質検査などが急ピッチで開始された。ここに来て、事態は深刻であるとの雰囲気は社会に広がり始めたかに思えた。

パラオでは年が開けると地元の野球リーグが始まるのが通例である。今年は、伝統あるパラオ・メジャーリーグに加え、パラオ・ナショナル・ベースボールリーグなる新リーグも開催され、その開幕戦が3月15日であった。まさに、水不足の最中の開幕である。日中の街中に容赦ない光線を照射し続けた太陽が西の空に消える頃、アサヒ球場に照明が灯されて試合は始まる。土埃の立つグラウンドで白球を追う選手達は、みるみるうちに汗と泥にまみれていく。断水を思えばゾッとする光景であるが、試合に興じる選手や観客達にはまるで屈託がない。試合後の選手達は「おや、もう今夜は洗濯できないね」、「験を担いで次戦まで洗濯はしないぞ」などと談笑しながら家路につく。そんな彼等の汚れたユニフォームを眺めつつ、「エルニーニョによる干ばつに伴う水不足」が

この街で起きていることを改めて想う。

水不足はきつい。飲み水を買集め、食事の際は紙皿を使い、トイレの排水を制限し、日によっては風呂を浴びない生活は、確かに快適ではない。どうかこの苦境を和らげたいとあれこれ考えてみる。しかし、これは自然の摂理であり人智を越えた自然現象だ。その流れにいかにか抗おうとも、我々人間は自然を克服することはできない。干ばつについて問われてある人は言った。「90年代にも深刻な干ばつがパラオを襲った。しかし、結果として死者一人出ることにはなかった。自然現象を前にジタバタしても仕方がない。今回の干ばつも、過ぎ去るまで待てばいい。」

実際には、パラオの人々はただ手をこまねいて天災が過ぎるのを待っていた訳ではない。水源の枯渇していないバベルダオブ島の北部地域の親族を訪ねて一時避難をしたり、ネットワークを最大限に活かして給水情報を収集したり、様々な工夫をこらして干ばつを凌いでいた。しかし、それは殺伐としたものではなく、どこか牧歌的な、まるで自然に身を委ねるかのような、ありのままを受け入れる寛容な対応策に見えた。人は自然と共存して生きている。ならば、その自然をありのままに受け止め、その中で可能なことを淡々とこなしていく。干ばつと向き合うパラオの人々の姿は、よくよく考えてみれば当たり前、しかしとても大切なことを思い出させてくれたような気がしている。

※このコラムは個人の見解です。



パラオの豊かな自然 (バベルダオブ島)